

万国博覧会とは その1

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

「くるぞ、万博。」ミャクミャクが右手を挙げてポーズをとる姿を大阪近辺で目にした方も多いだろう。そう、2025 年日本国際博覧会（以下、公式略称の「大阪・関西万博」と称す）の宣伝ポスターである。この文章を書いているのは開会式1週間前なので「くるぞ、」だが、4月13日におそらく夢洲で盛大な開会式が挙行され、これを読んでいただいているところは絶賛開催中であろう。筆者は1970年の大阪万博（正式名称は「日本万国博覧会」）を体験しているので、あの爆発的なエネルギーが55年後にどんな化学変化を起こして再び現れるのか期待が高まっている。

冒頭に、大阪万博に関する個人的な思いを記しておきたい。1970年当時、筆者は大阪市内の小学1年生だった。担任が熱心な美術の教員で、お祭り広場でおこなわれた絵画大会（だったと思う）に参加し、クラスが一丸となって所定の時間内に天神祭の絵を描ききった。残念ながら賞は獲得できなかったが、“子どもらしいダイナミックな絵”というような意味のお褒めの言葉を主催者からいただき、メダルを首に下げてもらって大層ご満悦だったことを覚えている。そのとき、担任がお祭り広場にそびえ立つ太陽の塔を指差し、あれは素晴らしい芸術家がつくったものなのだと、繰り返し熱く私たちに語った。おそらく岡本太郎に心酔していたのだろう。確かに大きくて、威圧的（に当時は見えた）で、奇妙な造形物に、子どもながら強い印象を受けた。その後の会期中に、遠足や家族旅行とで5回ほど出向き、いろいろなパビリオンを巡った。サンヨー館の人間洗濯機や日立グループ館のシミュレーター、せんい館の四谷シモン作の人形など、近未来の先進的な科学技術や不思議な前衛芸術に目を奪われたのは確かだが、一番刺激的だったのは、7歳で初めて対峙した“世界”だったと思う。あのとき世界各国の文化に触れることで、私は多くを学んだ。もしかしたら、10数年を経た後、世界の生活文化資料を収蔵する天理参考館に勤務することになる「未来」へとつながったのは、このときなのかもしれない。日本人が海外に出かけることが決して普通ではなかった時代に、世界の方から会場にやってくる、エキサイティングで啓蒙的なイベントだった。およそ人文社会科学系の研究を志し、なかでも学芸員資格を取得するために必修の博物館概論の講義を受けた人であれば、博覧会は避けて通れない。博覧会と博物館は、同じ人が見せる二面性のように、切り離せないものなのだ。学芸員の視点から、大阪・関西万博開催に関連して、博覧会について数回に分けて紹介したい。なお、博覧会には外国の国々を招致して開催する万国博覧会と、国内の諸機関で完結する内国博覧会の2種類あるが、本稿では主に万国博覧会（以下、万博と称す）について述べることにする。



図1 日本万国博覧会会場図 昭和45年

大阪万博にまつわる個人的なエピソードを書き連ねたが、55年前の万博を知っている世代と知らない世代で、今回の大阪・関西万博に対する思いが二極化している。「2025

トで検索すると、オープン1週間前でもなお“2025 大阪・関西万博中止”というカテゴリが出てくるのが悲しい。開催に否定的な人びとにとって、万博は“オワコン”らしい。「あんな多額の予算を使うのはムダ」という意見は、1851年に世界で最初に開催された第1回ロンドン万博のときから出ていた。このときの万博の正式名称は「万国の産業の成果の大博覧会」である。アテネで近代オリンピック



図2 日本万国博覧会入場券と券袋 昭和45年(図1・2とも天理参考館蔵品)

が産声を上げたのが1896年、サッカーワールドカップの第1回ウルグアイ大会の開催が1930年なので、万博はこれらよりも実に半世紀も先行していた。ちなみに、万博は国際博覧会条約に調印した「国家」でなければ開催も参加もできない。この条約の実務を担う機関が博覧会国際事務局（BIE:the Bureau International des Expositions）で、1928年に創設され、本部は現在もフランスのパリに置かれている。奇妙なのは、BIEは第一次世界大戦後に当時の国際連盟の下に設置されたがために、今は存在しない国際連盟の下部組織としてそのまま位置づけられていることだ。そして国際連合とは関わっていない。ともかく、万博を開くためにはBIEの承認、すなわち国際社会の同意が必要で、一国の事情や思惑で勝手に開催することはできない。ゆえに「経費が予想より高いのでやっぱり開催を中止します」とか「パビリオンの完成が遅れているので開催を1週間遅らせませう」などという申し出は通らないし、国際社会に対して恥をかくことになってしまう。BIEに開催申請できるのも、他国に参加招請できるのも「国家」のみで、万博はすべて外交ルートを通じておこなわれる大変“重い”イベントなのだ。国際オリンピック委員会（IOC）も国際サッカー連盟（FIFA）も大変著名ではあるが非政府機関であり、委員が政府を代表しているわけではない。さらにいえばオリンピックは「都市」のイベントだが、万博は「国家」のイベントである。都市の名称を冠した“大阪・関西万博”（“は筆者）は略称であり、「2025年“日本”国際博覧会」（“は筆者）があくまでも正式名たるゆえんだ。先述の国際博覧会条約の第一条「定義」には「博覧会とは、名称のいかんを問わず、公衆の教育を主たる目的とする催しであって、文明の必要とするものに応ずるために人類が利用することのできる手段又は人類の活動の一若しくは二以上の部門において達成された進歩若しくはそれらの部門における将来の展望を示すものをいう」とある。万博は“公衆の教育”がミッションであり、基軸となるのは“達成された進歩”と“将来の展望”、すなわち「未来」であると表明している。2025年に大阪・関西万博で日本国はどのような「未来」を描ききることができるのか、期待したい。